

古屋 正成

Masashige Furuya

古屋正成は東京で生まれ育った。

子供の頃は粘土でオブジェを作ることに関心を示し 10 代のときは陶芸をしていた。やがて美術学校で油絵を学び、画家として活動するようになった。現在は主にアクリル絵具と油絵を併用しながら制作している。

彼はを人間の思いの在りかを手掛かりに制作している。それは目に見えない形だけでなく、目に見える形でも現れていると考えている。

彼の祖父が串焼き屋を営んでいた関係で幼少期より酒場にいることが多かった。子供ながらに眺めていた酒場の光景や酔っ払いの姿を憧れを抱くことなく冷静に観察していた。しかし、大人になり” 大人の世界” “酒場の光景” に溶け込むようになり子供の頃には理解できなかったことが理解できるようになった。それは 1 日の仕事を終え次の日が始まるまでのわずかな時間に許される至福の時間があるということだ。

至福の時間が必ずしも歓喜に満ちた時間であるとは限らず、愚痴や涙に終始することもある。それでも至福だと言いたい。酒は神に捧げるものだから酒を介在した時間というのは神に許された時間ではないかと考えるからだ。それは至福以外の何物でもない。

過去でも未来でもない此処だけに存在する凡庸なる平常にこそ存在する至福の時間。他人から見れば侮蔑されたり愚かだと言われるような行為、それらに現れるメッセージを大切に見つめていきたいと考えている。